の道具ゆゑ、率爾に申出しがたかりしに、此日何とぞ中山を一目見せ給れとあるじに請て出させ、さてあるじ勝手へ入し間に取て袂へ入れ、相伴の人へは、いのちなりけり佐夜の中山と傳へよとのたまひて、暇乞もなくかへり給ひけり、幸庵立出て是を聞て、年たけてまたこゆべしとはおもはねど、出しぬかれたりとて笑ひになりし、翌日きのふの茶の禮とて使者あり、時服樽肴黄金貳百枚贈られけり、幸庵が家の者ども、此黄金納め置れん事いかゞといひしに、我苦しからざる趣向ありとて、厚く謝して、即其黄金もて、北野に一寺を建立して、祖先一家の菩提所とせられし、

〔茶話指月集上〕雲山といへる肩衝、堺の人所持たるが、利休など招きて、はじめて茶湯に出したれば、休一向氣にいらぬ體也、亭主客歸りて後、當世休が氣にいらぬ茶入おもゑろからずとて、五德に擲ち破けるを、傍に有ける知音の人もらうて歸り、手づから繼て茶會を催し、ふたゝび休に見せたれば、是ぞこそ茶入見事なれとて、ことの外稱美す、よて此趣キもとの持主方へいひやり、茶入秘藏せられよとて戻しぬ、その後件の肩衝、丹後ノ大守價千金に御求候て、むかしの繼目ところどころ合ざりけるを、繼なをし候はんやと、小堀遠州へ相談候へば、遠州此肩衝破レ候て、つぎめも合ぬにてこそ、利休もおもゑろがり、名高くも聞え侍れ、かやうの物は、そのまゝにて置がよく候と申されき、

附　古織（古田織部正）○全き茶椀はぬるき物とて、わざと缺て用られしことあり、よからぬものずきといふ人もあれど、此茶入われて後、利休却て稱美し、遠州公もかくの給ふにて、茶道の風流、別に有ことゝ知べし、頃（コノゴロ）の茶湯人の心たけたるにや、多クは古風をゑたひ物數奇も今やうの類にあらず、さるにより、破レたる茶器、損じぬる書畫、ふりたるまゝにてめで侍ることになりぬ、

〔老人雜話下〕茶入高直に成たるも近來の事也、老人（江村專齋）○少年の頃は、世上おしなべて名物と云